箕面駅周辺地区再整備計画

2009.12.18

行動に変化をもたらす

■人を誘導する為の仕掛けを造り流れに多様化をもたせたい

■滝道だけでない箕面の街も知ってもらう

行き来の道順を多様化する。
たったこれだけの事で人の流れを変え、街のあり方を変えることができるのではないかと思う。
西江寺方面へ上る坂道を歩いてみると滝道とはまた違う箕面の意外な一面を垣間見れる。
それも帰路とすることで、観光そのものを豊かにすると同時に行動範囲を広げ、商店街へのアプローチをスムーズにすることにより箕面全体の活性化につなげていける可能性を感じてならない。
今は未熟であっても長期的な計画を視野に入れ、魅力ある街造りを意識していく事で街も成長する。
そのためには視覚的価値もさることながら商店街が行うサービスによる「旅心をくすぐるおもてなし」の見直しも重要な要素となるのではないだろうか。

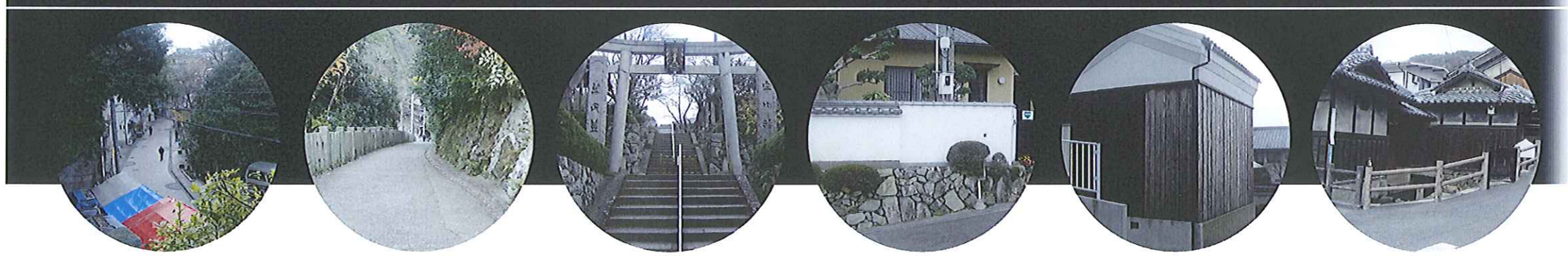
『今ある価値』と『未来への価値』

■観光の為の整備が本来あった情緒を失わせ
均質的な景観にしてはいないだろうか？

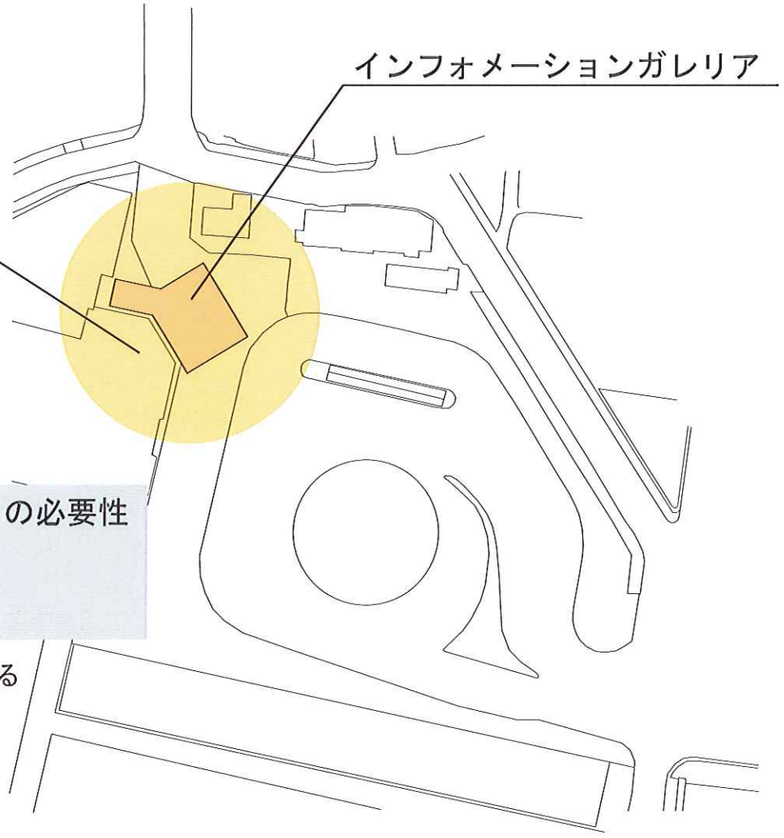
■時が経てば近代情緒の残る細道となりうる
（降りた先には自然と商店街へ通ずる流れ）

箕面を一望…とまではいかないが
開かれた開放的な景色も楽しめる

ー帰り道の新ルートにちりばめられた素敵要素ー



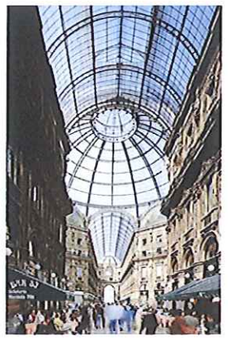
動線の変更、流れの変化



インフォメーションガレリアの必要性

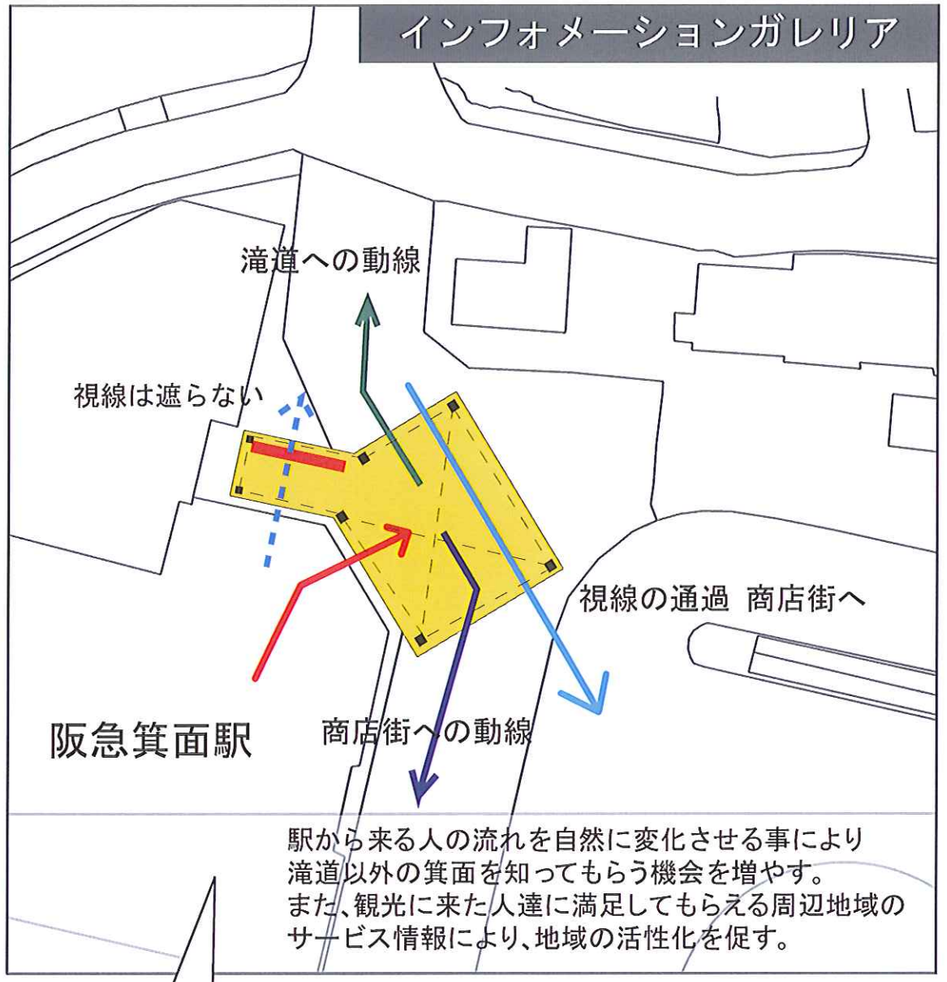
- Map　・展示
- 行灯　・情報　・・など

ソフト面　箕面には多くの魅力がある
春 :花見
夏 :蛍、納涼、花火鑑賞のスポット
秋 :紅葉狩り
冬 :天然プラネタリューム
など、新たな魅力の創造



外観のイメージは開放された空間であるが、各種のインフォメーションを提供したり、ソフト面のサービスの提供の場を構成する空間とする

箕面の魅力を多くの人に知ってもらえる場所として
この場所を活用する



■旅の拠点となるインフォメーションセンター
■観光客と共に造り上げるコミュニティの場

発見　共有
発信

観光圏と住商圏のボトルネックを中和させる

観光圏

従来の滝道

現状無視界境界線

住商圏

■インフォメーションガレリア
旅の拠点、駅の顔を明確にし
視点と行動の変化をつくる

阪急箕面駅

視界の通過

ロータリー

追加観光ルート

催事場兼ステージを設置する

シェルター新設

商店街への流れ

ウェルカムゲート新設

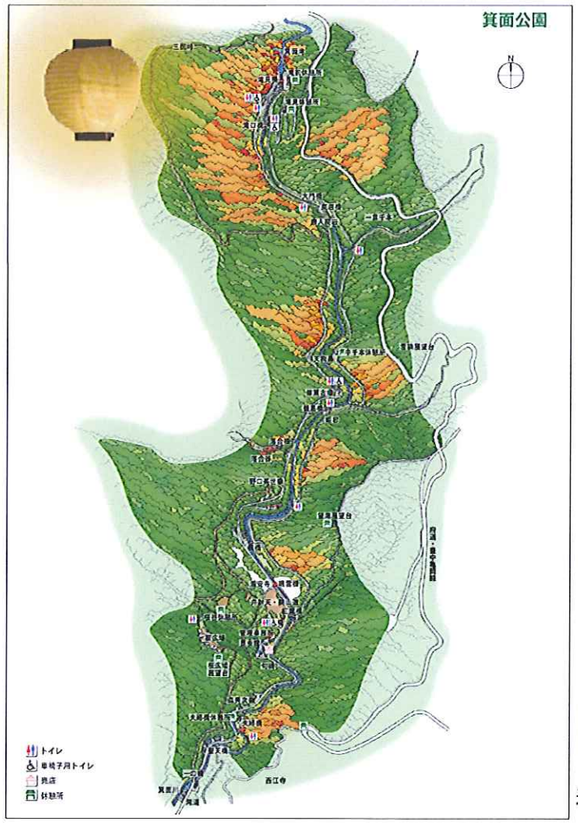
■新ルートから街へ回帰、目の前が商店街

■自然な流れで商店街への流れをつくる

風景と共に物語を楽しむ

■夜の顔に新たな感動を求めて

滝道の昼のすばらしさは周知の通りである。
お土産にもなっている紅葉は、秋深くなった季節には見事な風景を造る。
さまざまな人達が、各々の目で、体で楽しみを見つけ出していることだろう。
夜の姿も同じように、それぞれの価値観で楽しんで貰う事は出来ないだろうか?
近代では街は夜になっても街灯が点き、明るくて当然になっている。
しかし、人が居るからといってどのシーンでも明かりが必要な訳ではない。
そして、人工的な明かりによって視界を限定する事は価値を限定してしまう危険性もある。
本来、夜は暗いものであり、自分の灯りと共に歩き、暗がりという自然をもっと楽しむ。
その中で新たな「美」と「感動」を各々で発見して行く場を創って行きたい。



■提灯ぶらりの夜行散歩道

歩くという行為そのものに楽しい価値をつける。歩くのに必要な人が自分の灯りを手に持ち夜の散歩に行くという、ちょっとした冒険心で散策して欲しい。
灯りを中心としたコミュニティ。
楽しむ心があってこその楽しい旅を「サポート」出来るようなおもてなしの心を持った環境造りが求められているのだと考えます。
＊過剰なライティングがないからこそ出来る「現状」を生かしたい。

守りたいもの

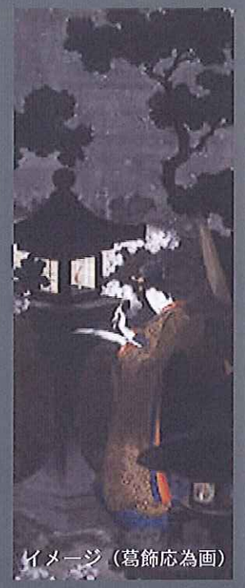
瀧安時前の蛍(2007)

＊提灯片手に蛍見物ができたら素敵だと思う
過剰なライティングが財産を破壊しない事を祈る

『もれる灯』と『はこぶ灯』

■もれる灯り計画と行灯による運ぶ灯りが人の心に残る暗がりの演出する

イメージ（葛飾応為画）

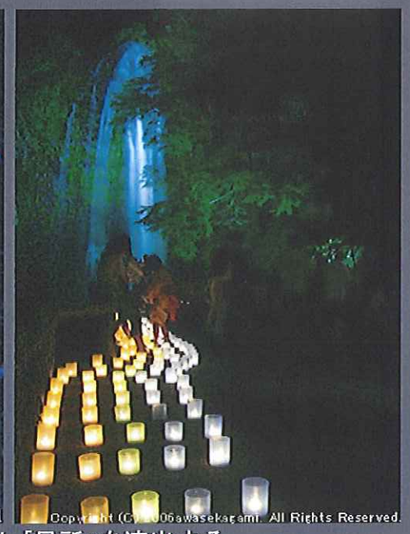

イメージ（葛飾応為画）

■照らさず、灯す

滝道に常備照明を設定する場合は、あくまで最低限のライトアップによる雰囲気を造るという配慮を忘れてはならない。
厳選された部分的なライトアップは見所の道しるべになるし、なにより暗がりに浮かび上がるからこそ美しいと感じるものである。
常備点灯の街灯設置による無差別に明かりを振りまき、暗がりを消し去る事は安全面という言葉に負けて、風情を奪う事になる恐れがある。

■LED行灯の製作し販売やレンタルを行う

- 使う人の単的情緒と、見る側の全体風情を演出したい
- 必要な人が必要なだけエネルギーを消費するエコロジー旅行
- 旅で利用した行灯が、そのままお土産になると更に良い(収益増)
- 一定の周期で行灯の灯りコンペを実施しデザイン性の高さを維持同時に、話題性と新しい歴史を創出する



■ライトアップの場所を厳選し「見所」を演出する

■自然の眺め「風景」が本来的にもつ不規則性、多様性を「美」として捉える２要素。
①崇高（サブライム）：自然環境の険しさに由来する、恐怖や苦しみ。つまり、暗い森、断崖、奔流など、それまで恐怖として拒絶の対象が「美」として新たな価値を与えられること　＊但し、身の安全は確信できることが前条件にある。
②ピクチュアレスク：「平滑」で「整然」としたものに対して、「粗さ」や「ぎざぎざゴツゴツしていいる」ことが条件となる、美意識。
上記を踏まえた上で、一般に既知化され、美としての評価が広く共有、定着されることで愛される風景となる。